St. Luke's International University Repository

Review of 2006 Undergraduate Exchange Program: Outcomes and Learning from Hosting International Nursing Students from Mahidol University and Yonsei University.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 恩城寺, 康子, 奥, 裕美, 片岡, 弥恵子, 鏑木, 洋子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/1293

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

報　告

学術交流協定による2006年度海外研修生受け入れプログラムの報告

園城寺康子[1)]　片岡弥恵子[2)]
奥　裕美[2)]　鏑木　洋子[2)]

Review of 2006 Undergraduate Exchange Program : Outcomes and Learning from Hosting International Nursing Students from Mahidol University and Yonsei University

Yasuko ONJOJI, MA[1)]　Yaeko KATAOKA, CMN, DNSc[2)]
Hiromi OKU, RN, MN[2)]　Yoko KABURAGI, MA[2)]
（聖路加看護大学2006年度国際交流委員会）

〔Abstract〕

This paper reviews the 2006 undergraduate exchange program, from a perspective of hosting exchange students of two sister universities. St. Luke's College of Nursing established the committee on international exchange, and posted an international coordinator in April 2006, to expand and improve international exchange activities.

During the academic year of 2006, the college received a total of eight international nursing students from Mahidol University, Thailand, and Yonsei University School of Nursing, S. Korea for two weeks. The exchange program at St. Luke's was designated for the international students to understand and experience Japanese nursing. For that purpose, it included clinical practicum in a hospital and visits to various health care facilities, as well as lectures and regular class participation.

The program provided a good opportunity for the international students and St. Luke's students to exchange views and understand similarities and differences of nursing in different countries. It also facilitated friendship development between both students. St. Luke's student volunteers played a core role in those activities, such as organizing welcome parties and weekend outings.

Through this year's undergraduate exchange, some issues became clear for improvement. The committee on international exchange will address these issues to organize a better program for next year.

〔Key words〕 **international exchange, undergraduate exchange program, intercultural understanding, volunteers**

〔要　旨〕

2006年4月，本学では国際交流活動の充実を図るため，学内に国際交流委員会を設けた。国際交流担当事務職も設置され，学内での国際交流事業の運営が制度化された。本校は学術交流協定に基づき，2006年度はタイのマヒドン大学看護学部と同大学医学部看護学科ラマティボディ看護学校，韓国延生（ヨンセイ）大学看護学部の3校より，それぞれ約2週間の日程で合計8名の研修生を受け入れた。

海外研修生の受け入れプログラムは研修生のみを対象とした講義に加え，演習授業への参加，医療施設への見学・実習など，わが国の看護教育や実践の場を体感できる場を提供し，さらに両国の学生がお互いの国における看護をめぐる状況や課題について意見を交換する機会も設けた。また本プログラム中，歓迎会・交流会・

1）聖路加看護大学　国際交流委員会委員長　St. Luke's College of Nursing, Committee on International Exchange, Chair
2）聖路加看護大学　国際交流委員会　St. Luke's College of Nursing, Committee on International Exchange

2006年11月6日　受理

週末の旅行といった企画は，学生ボランティアの積極的な取り組みによって行われ，学生が文化的相違を知り，国際的感覚を養い，さらに国境を越えた友情を育む絶好の機会となっていた。

初年度の活動を通し，今後継続した国際交流活動を行うためには，改善すべき課題も明らかになった。それらの課題を踏まえ，国際交流委員会として制度整備を進めたいと考えている。

〔キーワーズ〕 国際交流，海外研修生受け入れプログラム，異文化理解，ボランティア

Ⅰ．はじめに

「国際化時代」といわれる今日，日本および世界はますます新しい状況への対応を迫られるようになってきている[1]，といわれている。看護学教育においてもそのカリキュラムに「国際保健」や「国際看護」に関する科目が設けられ[2]，国際交流担当の公式部署の設置がある看護大学が，大学内・学科内になされているものを合わせて，86％にのぼる[3]など，看護学教育においても国際化への取り組みは推進されている。

そのような中，本学では看護という共通語を通して，学生の国際的視野を広げるため，多くの機会を提供している。様々な国や地域の学生が交流し，異文化理解を深め，国際的視野を身につけることや，お互いの国における看護制度や社会・文化的背景を実際に体験し，複眼的視野や国際感覚を養う機会を提供することが，その目的とされており，2003年度には米国オレゴンサイエンス大学看護学部と初の学術交流協定を締結し，現在までに韓国延世（ヨンセイ）大学看護学部，タイ・マヒドン大学看護学部，マヒドン大学医学部看護学科ラマティボディ校，カナダ・マクマスター大学看護学部の4大学5学部と協定を結んでいる。このうち，学部レベルの交流としては，2005年度に，延世大学看護学部との間で短期交換海外研修プログラムを開始している。更に，海外からの研修生受け入れにあたっては，お互いの交流を通して，本学にいながらも異文化を学ぶ契機とすることも目指している。

こうした本学における国際交流推進の流れの中で，2005年度には，学内に交換留学生世話人会を組織し，初めての海外研修生受け入れと，本学からの研修生派遣を実施した。2006年4月には，国際交流委員会を設け，国際交流担当の事務職ポストを設置し，国際交流事業の運営を制度化した。国際交流委員会では，交換留学生世話人会によって前年度の課題・問題等の貴重な経験が報告書としてまとめられていたので，それを基に，活動を開始することができた。

2006年度は，マヒドン大学看護学部と同大学医学部看護学科ラマティボディ看護学校，延世大学看護学部の3校からそれぞれ約2週間の日程で研修生を受け入れ，日本の看護・文化を紹介するとともに，本学学生との交流を行った。

本稿では，海外研修生受け入れプログラムを振り返り，その成果および今後の課題について報告する。

Ⅱ．タイ・マヒドン大学からの海外研修生受け入れ

1．受け入れプログラム

本学はマヒドン大学看護学部と医学部看護学科ラマティボディ看護学校の2校それぞれと，2005年に学術交流協定を締結している。2006年度は，学術交流締結後初めて両校から各2名，計4名の看護学部生を本学に受け入れた。5月9日～18日の10日間の日程で，日本の看護を学び，文化や生活習慣を体験することとともに，本学学生との交流を深め，両国の看護観について理解を深めることを目的としたプログラムを実施した。プログラムの具体的な日程を**表1**に示す。

プログラムでは研修生のみを対象とした講義に加え，演習授業への参加や，医療施設等への見学・実習など，わが国の看護教育や看護実践の現場を肌で感じる場を提供した（**写真1，2**）。また研修生，および本学学生にはあらかじめ，自国の看護や保健医療提供体制・文化について学び，お互いに発表するということを課題とし，意見交換を行う機会を設けた。なお，本プログラムのもう一つの特徴として，上記の課題発表や研修生歓迎会・学生交流会・週末の旅行といった企画に際し，その運営がボランティアの学生によって行われたという点がある。これらの学生主体のプログラムは，両国の看護や保健医療福祉に関する学びを深めるだけでなく，文化的相違を知り，国際的感覚を養い，さらに国境を越えた友情を育む絶好の機会となっていた。

2．海外研修生からの感想

プログラム最終日に研修プログラム評価のためのアンケートを実施した（**表2**）。研修生の満足度は高く，4名全員がプログラムは日本の看護や文化を学ぶという期待に沿うものであったと回答している。プログラム全体としては，「プログラム全体は大変よかった」「よい経験と友だちを得ることができた」との感想が寄せられた。

また，個別プログラムの内容として「本学学生との授業」は評価が高く，その理由は「(本学) 学生との交流

表1　タイ・マヒドン大学研修生受け入れプログラム

日	時	日　程
5月8日（月）	午　後	成田空港到着
5月9日（火）	10：00－11：30	オリエンテーションと大学案内
	11：50－12：40	学生主催歓迎会
	13：00－15：00	学生主催交流会
	15：00－16：00	学長・学部長訪問
	18：00－	学部長主催夕食会
5月10日（水）	10：15－12：00	講義：「日本の母性看護」
	13：00－14：00	るかなび催事：茶道と健康
	14：30－16：00	るかなび・看護実践開発研究センター案内
5月11日（木）	9：00－10：00	講義：「日本の看護教育」
	11：00－12：00	講義：「日本の小児看護」
	14：20－17：30	授業：「国際看護ゼミナール・タイと日本のプライマリヘルスケアについて」（発表・意見交換）
5月12日（金）	9：00－12：00	見学／実習：「中央区立介護老人保健施設リハポート明石」
	16：00－17：30	演習：「看護援助論Ⅱ」
5月13日（土）		学生ボランティア週末交流企画：東京周辺案内
5月14日（日）		学生ボランティア週末交流企画：日光観光
5月15日（月）	12：40－14：10	授業：「異文化コミュニケーション・タイと日本の家族生活とノンバーバルコミュニケーションについて」（発表・グループディスカッション）
	14：20－15：50	授業：「英語表現法Ⅱ-S」
5月16日（火）	9：00－15：00	見学／実習：「聖路加国際病院」（病棟実習） 1200－1300：お昼休憩
	15：30－17：00	見学／実習：「聖路加国際病院」（病院案内）
5月17日（水）		自由日
5月18日（木）	10：00－11：30	見学／実習：「東京都福祉保健局健康安全室・東京都のエイズ対策について」
	12：00－12：40	送別会
	13：00－13：30	プログラム評価記入
5月19日（金）	午　後	成田空港出発

写真1　学生ボランティア運営の研修生歓迎会

をすることができたから」となっている。半面「研修生だけの講義」に対する評価は低くなっており，研修生がプログラムに期待し重視していたのは，本学学生との意見交換や経験の共有であり，それらを通じて日本の看護や文化を学ぶという点にあったものと考えられる。

3．本学学生ボランティアの活動と感想

海外研修生を受け入れるにあたり，2005年度と同様に，学生ボランティアを募集した。募集は，同年夏にマヒドン大学にて総合実習を行う予定であった4年生と，前年度に韓国の延世大学からの海外研修生の受け入れに際し，

写真2　病院での見学実習

ボランティア活動を行った経験を持つ学生を中心に行った。その結果，計23名の登録があり，研修生の歓迎会，交流会，週末の周辺観光の運営を依頼した。

プログラム終了後，海外研修生受け入れにあたっての感想を収集するため，アンケートへの回答を依頼し，さらにグループインタビューを行い意見を募った。その結果を**表3**に示すが，数多く寄せられた意見としては，「ボランティアの活動開始から研修生来日までの期間が

表2　タイ・マヒドン大学研修生のアンケート結果（回答者数4名）

質問	回　　答	回答数
研修プログラムで期待していたこと（複数回答）		
	・日本文化，日本の看護・看護教育，生活習慣について知り，交流すること	4
	・タイと異なる日本の看護について学び，それをタイで応用すること	2
期待に沿ったか		
	はい	4
	いいえ	0
一番楽しかったプログラムと，その理由		
	・聖路加看護大学学生との授業（異文化コミュニケーション，看護援助論Ⅲ，国際看護ゼミ） （理由）自分の経験を教師と学生と分かち合うことができたから	3
	・病院での見学実習 （理由）看護師の仕事を実際に見ることができたから	1
あまり楽しくなかったプログラムと，その理由		
	・タイ留学生だけの授業 （理由）学生との交流がなかったので。日本の考え方に触れられなかったので。聖路加看護大学生が参加したら内容は素晴らしかった	4
プログラム全体として，忙しかったか		
	はい	0
	いいえ	4
プログラム全体の評価		
	・プログラムは大変よかったが，滞在日数がもっとあったほうがよい。また，ホストファミリーへの滞在があってもよかったと思う ・滞在日数がもっと長いほうがいい。1ヶ月くらいあると十分と思う ・プログラム全体は大変よかった。聖路加の学生がレクチャーや病院実習に一緒に参加したらもっとよかった	
今後の改善に係るプログラムについてのコメント		
	・聖路加看護大学生と一緒の授業 ・交換留学の日数が短い。交換留学の日数が，例えば3週間から1ヶ月と長いほうがいい。2週間は，知識や文化・伝統を交流するには短すぎる。しかし，このプログラムは大変成功だと思う。よい経験と友人を得ることができた	

表3　タイ・マヒドン大学研修生受け入れボランティアの感想（アンケートとグループインタビュー結果のまとめ）

	感　　想
大学側の支援体制に関すること	（経済的支援） ・週末の旅行を（経済的に）サポートしてもらえて助かった ・2週間サポートがあったとはいえ，経済的に苦しかった。先生たちから一口3,000円くらいでカンパしてもらうのはどうでしょう。研修生と一緒に行動する人の活動費が出れば，ボランティア参加率もアップするのでは （準備期間と役割の明確化） ・準備期間が短い。もっと前から予定を伝えてもらえれば準備もしやすかった ・ボランティアの役割（何をする人なのか）をもっと事前に知らせてほしい
学生ボランティアの運営に関すること	・学年を超えた協力体制ができなかった。学年ごとに行事を計画したので，他の学年が何をしているのかがわからなかった ・今後を考えるとボランティアの連絡先を書いた紙を渡したり，メーリングリストを1年ごとに作るなど。ミーティングする部屋をもっと小さくしてはどうでしょう ・集合機会を密にする必要がある。誰が責任者かを決めてリーダーシップをとる ・他の学生にアピールし盛り上げるのがボランティアの役割なのではないか ・ボランティア内の話し合い・仲介役としてもっと内容を煮詰めておけばよかった ・昨年は「この日は誰が何をする」というプランを学生主体でまとめていた（7月来日に向けて4月から準備開始）。今年は時間がないし，人も少なくてできなかった
研修生との交流に関すること	（学生ボランティア個人） ・常にボランティアはネームプレートをつけていたら，名前と顔が一致しやすいかと思う ・Welcome Party だけでは学生との交流は不十分なので，できるだけ早期にいろいろな学生と知り合えるように，授業参加する ・研修生は放課後毎日何かがあると思っていた ・バディシステム（1研修生対1ホスト学生）といった担当制があるのはどうか。ずっと密着ではなくてもランチタイムだけでも担当者みたいのがいたら相手も安心するのではないか ・土曜日に一日一緒に過ごしたが，仲良くなれるのは夕方くらいだった。せっかく仲良くなったのに，その時しか交流することができず残念だった （大学全体） ・ボランティア以外の人はあまり研修生が来ていることさえ知らない。興味がないのか，受け入れるという気持ちがないという印象がした。内容が見えないと他の学生もどう接していいのかわからない

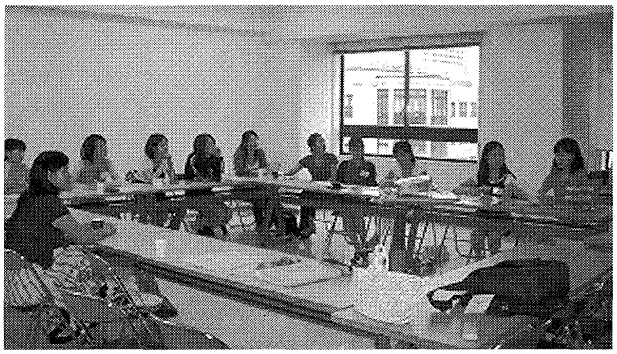

写真３　国際看護ゼミでの意見交換

短く，十分な準備ができなかった」ことや，「企画実施にあたり大学からの金銭的な支援が十分でなかった」という点や，「ボランティア間で，海外研修生との交流の度合いに差があった」ことなどがあった。

国際交流委員会の活動は新年度開始と同時にスタートしたが，研修生受け入れは5月初旬～中旬に計画されており，学生ボランティアの募集時期が来日2週間前となった。直前に大型連休があったため，実質的な準備期間はさらに短く，ボランティア学生同士の交流も図りにくく，また，満足のいく準備ができなかった。こうしたことが原因で，達成感が得られなかったことがアンケート結果の背景となったものと考えられ，今後改善を要する点となった。

Ⅲ．韓国・延世大学看護学部海外研修生受け入れ

１．受け入れプログラム

延世大学看護学部とは，2003年に学術交流協定を締結しており，2006年は，2005年に続き第2回目の研修生受け入れとなった。受け入れ期間は6月19日～30日の2週間で，延世大学看護学部2年生2名，3年生2名の計4名が来校した（**写真３，４**）。プログラムでは，マヒドン大学からの研修生と同様の目的の下，日本の看護システムや看護教育に関する講義，本学学生との授業，医療施設の見学・実習と，学生ボランティアによる学生交流企画などを行った。研修生受け入れプログラムの具体的な日程は**表４**に示す。

延世大学からの研修生受け入れプログラムでは，韓国の学生の関心が高いと考えられる事項を盛り込むことを考慮し，計画した。そこで韓国の保健・医療・福祉をめぐる問題に精通した教員の示唆を受け，韓国でも進行している高齢化社会について，わが国での取り組みに関して学ぶ機会を設けることとした。

２．海外研修生からの感想

プログラム最終日に受け入れプログラムについての意見や感想を募るため，アンケートを実施した（**表５**）。研修生が期待していたことは，主に日本文化や日本の医療・看護システムについて学ぶことであり，研修生全員のプログラムに対する満足度は高かった。

写真４　学生間の交流

「最も印象に残ったプログラム」については，それぞれに異なる意見が出されているが，「日本でやり残したことについて」の意見と合わせてみると，本学学生とともに授業に参加することや，交流を持つことに対しての関心が強かったことがうかがえる。また，「プログラム全体の評価」として，スケジュールに中途半端な空き時間があることを指摘する研修生もあり，自由時間の確保とともに，そのタイミングや過ごし方を含めたプログラム全体のスケジューリングについて，検討する必要がある。

３．学生ボランティアの活動と感想

マヒドン大学の研修生受け入れ時と同様に，延世大学研修生受け入れに際しても学生ボランティアを募り，両国の学生の交流を推進するための企画の運営を依頼した。ボランティアとして参加した学生は，1年生から3年生までの12名で，マヒドン大学からの研修生受け入れ時の学生ボランティアが多数，再度ボランティアとして活躍した。

マヒドン大学研修生受け入れ時の反省と経験を活かし，今回は，学生ボランティア間での連絡を密にし，情報を全員で共有するためのメーリングリストの設置や，研修生に向けて学生ボランティアを紹介するためのパンフレットを作成する，といったアイデアが提案された。さらに，交換研修プログラムに関しても，昼休みに昼食を食べながらの学生交流や韓流映画上映会，ハングル語講座といった新たなプログラムの企画が提起され，開催された。

学生ボランティアからの感想は，**表６**にまとめた。「交流プログラムをより深く楽しめた」「他の学年の人や研修生と仲良くなれた」といった感想に代表されるように，ボランティアに参加したことについて，高い満足感

表4　韓国・延世大学交換留学生受入れプログラム

日　　時		日　　程
6月18日（日）	午　後	成田空港到着
6月19日（月）	10：00－11：30	オリエンテーション，学長・学部長訪問
	11：30－12：30	学生ボランティアの紹介（@カフェテリア）
	13：00－14：00	大学案内
	14：20－15：50	演習：「地域看護論Ⅱ・赤ちゃんのフィジカル・アセスメント」
6月20日（火）	11：50－12：40	学生主催歓迎会
	13：00－15：00	学生主催学生交流会
6月21日（水）	9：30－12：00	見学／実習：「中央区作業所・リバーサイドつつじ」
	13：30－15：00	講義：「LPC 式生活習慣ドックの22尺度の年齢別，性別，あるいは職業別平均値の分析」
6月22日（木）	11：40－12：40	学生ボランティア企画：学生交流昼食会
	13：00－14：00	講義：日本の看護教育
	14：30－15：30	講義：日本の母性看護
	18：00－20：00	学生ボランティア企画：韓流映画上映会
6月23日（金）	10：00－12：00	見学／実習：「中央区立介護老人保健施設リハポート明石」
	18：00－20：00	学生ボランティア企画：韓流映画上映会
6月24日（土）	11：00－18：00	学生ボランティア企画：日本の家庭訪問
6月25日（日）		自由日
6月26日（月）	10：00－11：00	講義：「日本の老年看護」
	12：40－14：10	授業：「異文化コミュニケーション・日本と韓国の諺からみる文化観の違いについて」（グループディスカッション）
	14：30－17：00	授業：「国際看護ゼミナール・日本と韓国の保健システムと健康問題について」（発表とディスカッション）
6月27日（火）	10：00－14：00	見学／実習：「聖路加国際病院」（病棟実習）
	14：30－16：00	見学／実習：「聖路加国際病院」（病院案内）
	18：30－	学部長との夕食会
6月28日（水）	1：30－11：30	講義：「地域看護」
	13：00－14：00	講義：「小児看護」
	14：00－15：30	看護実践開発研究センター・るかなび案内
	17：00－18：00	学生ボランティア企画：Language Exchange～韓国語と日本語を使ったゲーム～
6月29日（木）	14：00－15：00	見学／実習：日本看護協会訪問
6月30日（金）	11：50－12：40	送別会
	13：00－13：30	プログラム評価
	14：00－16：00	学生ボランティア企画：浴衣とチョゴリ着付け
	18：30－	学生ボランティアによる送別会
7月1日・2日	午　後	成田空港出発

が得られたようである。ただし，マヒドン大学の際と同様に，ボランティア募集からプログラム開始までの期間に余裕をもたせることや，大学の公式行事であるなら，費用や施設利用に関して更なる支援がほしい，といった大学側に対する要望も寄せられた。

Ⅳ．成果と今後の課題

2006年度の海外研修生受け入れプログラムについてそれぞれ報告したが，海外研修生と学生ボランティアに実施したアンケート調査の結果をもとに，交換留学制度全体としての成果と，来年度へ向けた課題について以下に述べる。

1．研修生と本学学生の交流について

海外研修生受け入れプログラムの目的のひとつであり，学生の関心も高い，両国の学生交流については，マヒドン大学と延世大学によってその満足度が異なり，延世大学の研修生の方が，本学学生との交流に対する満足度が高かった。これには，延世大学学生プログラムに，ボランティア学生が彼らの視点で考えたさまざまな交流企画を新たに組み込み，実施したことが背景にあると思われる。ボランティア学生側の感想としても，マヒドン大学受け入れ時には得られなかった，双方の交流に関する満足感が，延世大学受け入れ時には高くなっていた。さらに，「韓国の文化を知り，日本の文化を見つめ直すことができた」「たくさんの新しいことを知り，研修生から良い刺激がもらえた」「英語を勉強する気がでる」といった感想からも，学生ボランティアの活動が，異文化理解や複眼的視点の育成といった機会になっているだけでなく，新たな学習意欲を生み，向上心を高めるよい契機にもなっていたということがわかった。

しかし，ボランティア学生以外の本学学生と海外研修生の交流については，「研修生と交流しようとしてくれ

表5　韓国・延世大学研修生のアンケート結果（回答者数4名）

質問	回　　答	回答数
研修プログラムで期待していたこと		
	・日本の文化・看護システムについて学ぶこと・日本と韓国の違いについて知ること	4
	・高齢者に対する日本の看護システムについて学ぶこと	1
	・日本看護協会を訪問すること	1
	・日本の友人を作ること	1
期待に沿ったか		
	はい	4
	いいえ	0
一番楽しかったプログラムと，その理由		
	・リハポート明石　（理由）韓国も日本と同様に高齢化社会で，日本の介護から多くを学ぶことができた	1
	・（週末の）家庭訪問　（理由）文化の違いや日本の生活スタイルを知ることができた。また聖路加の学生と友達になれ，多くのことを話すことができた	2
	・ミニレクチャーや授業への参加	1
	・病院実習　（理由）看護師の働く姿を学んだので。韓国と日本の看護師の違いがわかりました	1
あまり楽しくなかったプログラムと，その理由		
	・なし。日本で学ぶことすべてに関心があり楽しかった	2
	・リバーサイドつつじ　（理由）施設と法律についての説明が難しかった	1
	・ミニレクチャー　（理由）数が多く，いくつかは繰り返しだった	1
プログラム全体として，忙しかったか		
	適切だった（Manageable）	4
	・次のプログラムまでに空き時間がある日があった	
	・1日に3つのプログラムというのは忙しい。2つくらいがいい	
日本でやり残したこと		
	・聖路加国際病院の小児外来	
	・日本語は分からなくても，普通の授業に参加し，学生がどのように勉強するのか見たかった	
	・聖路加の学生と一緒に観光に行きたかったが学生は忙しそうで難しかった	
プログラム全体の評価		
	・2週間で様々な経験ができるようにプログラムが作られ，多くのことを学べ，とても面白かった	
	・すべては適切でよかった。ただ，次のプログラムまでに空き時間が多いときがあり，その間どうしていいか分からなかった	
	・とてもよい経験になった。歓迎会はとても感動的だった。統計がいくつかのミニレクチャーで繰り返されていた	
今後の改善に係るプログラムについてのコメント		
	・聖路加看護大学生が韓国に来たら，このようなプログラムを作りたい。コメントはありません。いろいろありがとうございました	
	・すべては素晴らしく，完璧でした。ありがとうございました	
	・2日の自由日が欲しい	
	・訪問見学プログラムは，様々なことが学べ，大変よかった。統計分析のミニレクチャーも面白かった	

る人がたくさんいてよかった」という意見があった反面，「一部（の学生）しか交流していないようで残念だった」「イベントや企画への参加は，わりと消極的だったような気がします」といったボランティア学生の指摘にもあるように，本学学生の国際交流への関心はまだ限られた一部の学生のなかに留まっているようである。大学として，海外研修生を受け入れることで，広く学生に国際交流の機会を提供することを目標にするのであれば，研修生の来日をアピールする方法を工夫することや，研修生のスケジュールを学生に公開し，空き時間には自由に交流することができるようにすること，さらに，これまでのように研修生のみを対象とした講義を特別に企画するのではなく，通常授業への研修生の参加回数を増やすこと等，今後のプログラム作成に関して，検討が必要である。

2．学生ボランティアの支援

学生ボランティアは，学生の視点から交流プログラムに関するアイデアを発案し，計画・運営を通して双方の交流を促進する本学学生の中心的役割を担っており，こうした活動を大学が支援していくことは重要である。今年度の活動を通して，ボランティア学生に対する大学側の支援体制として改善が必要だと思われる点は，以下の2点である。

1点目に，ボランティア学生の研修生受け入れに対する準備期間を十分に確保することである。前述したが，新年度開始の4月に国際交流委員会が発足した後1ヶ月で，マヒドン大学からの研修生を受け入れるというタイムフレームもあり，ボランティアの募集が研修生来日の間際となった。そのため，十分な準備期間を取ることができなかったことが，ボランティア学生間のまとまりや，企画の準備，研修生との交流の度合いに影響した。来年度以降の受け入れにあたっては，前年度から受け入れ日程

表6　延世大学研修生受け入れボランティアの感想（アンケートとグループインタビュー結果のまとめ）

	感　　想
大学の支援体制に関すること	（ボランティア募集） ・ボランティア企画や学生への通知があまりに遅すぎた。バイトやボランティアの予定は普通1ヶ月前に決めるものだから，それより前に学生に企画を通知できて予定が立てられたら，もっと人が集まったと思う ・ボランティア募集を特にもっとPRして欲しいです ・ボランティア募集のときに，どういうプログラムかとか，昨年の様子がイメージできるようにすると本当にやりたい！と思っている人がたくさん集まってきてとても理想的なボランティアが集まると思います。私の場合，ボランティアをやる前はよくわかっていなかったけれど，「やってよかった！」って終わってから気づきました ・受け入れ時期を調節してください （金銭・施設の支援） ・広報のための資金の提供，学内放送etcの活用→多くの学生を主体にしたかった ・アクティビティを更に充実させるためには，もう少し金銭的サポートがほしい（週末のアクティビティの学生ボランティアの自己負担を減らすために，できなかったこともある） ・大学の売りとして留学システムはあるはずだし，もっとサポートしてもらい，更にグレードアップすることで大学の利益につながると思う。受け入れについても派遣についてももっと認知度を上げるべきだと思う ・費用負担や施設利用をもっと協力してほしい。交流のためにあれこれやっているのに，制御されるというか，スムーズにいかないことが多少あった。公式行事なので大学の全面バックアップがほしい
研修生との交流に関すること	（学生ボランティア個人） ・とてもよい交流ができた。たくさんの新しいことを知り，研修生から良い刺激がもらえた ・ボランティア紹介のパンフレットがあったため，名前をお互いに覚えて仲良くなれたことは良かったと思う ・一人ひとりと親身になれてよかった（特にプライベートで映画見に行ったりチマチョゴリ着たり）本当に友人になれた ・楽しい！　英語を勉強する気がでる ・研修生全員と話したり，1対1で話す機会もあり，帰国後もメールのやり取りをしていて，交流できて満足 ・とても楽しかった。積極的に話ができてよかった ・テストやレポート等で参加は頻繁にできなかったが，昼食を一緒に食べたり研修生と交流できたと思う ・積極的に話ができたし，話す機会も多く取れたので楽しかった ・すごく仲良くなれた。もっと遊びたかったけど ・楽しかった （大学全体） ・学校全体の交流会で，たくさんの人が来てくれたことは良かった ・研修生と交流できた人が，前回のタイの時より多かったのでは，と思います ・全体を巻き込んでよく盛り上がっていたと思う ・「看護」という一つの学問で深く親しくなれたと思う ・あまり教室にくることがないなどで，知らない人もいたと思うけど，ポスターがたくさん貼ってあったり，多くの交流イベントがあったのでよかった ・研修生と交流しようとしてくれる人がたくさんいてよかったです ・韓国プログラムとして盛り上げようと，映画や会話交流企画をしたのに，ぜんぜん人が集まらず，何て他人というか世界に関心がなさ過ぎるんだろうと思った。歓迎会でさえ，「中央に集まってください」と学生にお願いしながら，あまりの無関心さに悲しくなりました。そんな人たちに絶対看護されたくないです ・研修生が来ていることは知っていたようですが，イベントや企画への参加はわりと消極的だったような気がします ・あまり認知度が上がらなかったかも。タイよりは良かった（?!） ・一部しか交流していないようで残念だった
ボランティアをしてよかったこと	・交流プログラムをより深く楽しめた ・他の学年の人や研修生と仲良くなれた ・ヨンセイの学生と仲良くなれた ・国境の関係なく，日韓交流ができてよかった。コミュニケーションの大切さを身をもって感じることができた ・異文化に直接触れることができた。交流を通して日本の文化のよさを見つめ直すことができた ・韓国の学生と交流できた。ボランティア企画を通じて，海外との関わりのある仲間を見つけられたこと ・韓国の友だちができたこと。韓国の文化や言語に興味がわいたこと ・研修生と交流できた。韓国の同世代の子たちの興味あること（価値観）とか知ることができた ・韓国の研修生と仲良くなれた。文化を知ることができた。日本の文化も見直すことができた ・大好きな韓国人と交流できた ・学生が楽しんでくれたように思えたこと。日本の雰囲気に触れられたようだったから。自分も楽しかった

を確定し，可能な限り早くから学生に周知を図り，ボランティア募集を行うことが必要である。

さらに，このような形で自主的に研修生受け入れに関わり，年度を重ねるごと，より高い満足感・充実感が得られるような活動にしていくために，活動に継続して参加し，ボランティア学生をまとめ，リーダーシップをとることのできる学生を育成するという視点で大学側が関わることも重要であると考える。

2点目に，財政面における学生ボランティアの支援についてがあげられるが，大学としてこれを無制限に支援することは難しい。しかし，国際交流の主役である学生が主体的に事業に参加できる学生ボランティアの存在は不可欠であり，その活動の活性化を図るためにも，可能な範囲での資金面のサポートは必要である。学生の求める支援の範囲について，具体的に探り，また，大学としてどこまで可能なのかについて，率直な議論が必要である。

3．学生ボランティア募集の限界

今年度行われた2回の海外研修生受け入れのための学生ボランティアには，前年度の研修生受け入れ時に同様の経験を持つ者や，マヒドン大学に引き続いて延世大学のボランティアとして活動した者がいたことは，前述したとおりである。彼らはボランティア，すなわち自主的にこの活動に参加しており，「海外研修生によりよい時間をすごしてほしい」という強い気持ちを持っていた。彼らの企画力・行動力は回を重ねるごとに充実したものとなり，上級生がリーダーシップを取り，今後も継続した活動が行われるよう，また一層発展するよう，後輩にノウハウを伝えていた。このような学生ボランティアの存在は，海外研修生を受け入れ，本学の交換研修制度を運営する上では，欠くことのできないものである。

しかし海外研修生受け入れに対する本学学生全体としての気持ちには，個人による温度差があることもまた事実である。そしてすでに，大学，学生間での再三の呼びかけにもかかわらず，今年度の学生ボランティアに，学年によっては全く参加者がいないという状態となっている。これまで，学生の自主性による活動を大学側が促し，支援するという立場で関わってきたが，自主性のみに頼る現在の方法には，限界があるものと考える。

Ⅴ．おわりに

今年度は，国際交流委員会の設立から約1ヶ月での海外研修生の来日という，大変短期間で，慌しい中，手探りの状態で海外研修生の受け入れプログラムが実施されたが，海外研修生にも本学の学生にも，充実した交流の機会を提供できたといえよう。今年度明らかになった課題とともに，本稿では報告の対象としなかった海外研修生受け入れに必要な費用や費用相当の効果の測定，教員側からの海外研修生受け入れに対する意見など，議論すべき課題は山積していると考えるが，この交換研修制度によって，本学および海外研修生にとって，海外で同じ志を持つ友人と出会い，友情を育み，将来にわたってその知見を高めあえる「海外の同僚」を持つ機会が提供できるよう，国際交流委員会として制度整備を進めたいと考えている。

謝　辞

マヒドン大学，延世大学の研修生受け入れにあたり，ご多忙にもかかわらず，講義や演習授業の担当や，見学実習先の紹介をして下さった学内の諸先生に心より感謝申し上げます。特に，マヒドン大学との交流開始にご尽力頂いたWHO委員会，国際看護学の諸先生に，深く感謝申し上げます。

引用文献

1)　尹健次．国際化時代の国民教育と歴史認識．国際化時代の教育．東京．岩波書店．1998, 50－70.
2)　大関信子．国際化に対応する．Quality Nursing. 3(11). 1997. 65－73.
3)　北池正，宮崎美砂子．日本の看護学教育における国際交流の実態と課題．Quality Nursing. 8(6). 2002. 4－8.